

されたのではないにしても、忘れられていた場所や普通の場合が従来とは異なるイメージの中で聖地として訪れられる場合がある。本報告ではこのような「場所の表象戦略」という問題意識の下、「婚活の聖地」「恋愛の聖地」として全国区の知名度をもつ浅草の今戸神社の事例を検討する。

数年前の今戸神社は地域住民以外にはほとんど知られていない場所であったが、現在では、婚活系・恋愛系のパワースポットとして必ずとり上げられ、浅草地域のガイド本では必ず紹介されるようになっていく。実際、立地の悪さにもかかわらず、平日でも境内には多くの女性参拝客の姿がみられ、外国人の訪問者も少なくない。また数年前からは初詣に四〜五時間待ちの行列ができるようになっていく。本報告では今戸神社の表象戦略を次の七点にまとめた。①下町八社福参り・浅草名所七福神、②沖田総司終焉の地、③招き猫発祥の地・今戸焼発祥の地、④真円形の絵馬、⑤縁結び会、⑥活発なメディア発信と女性神職の活躍、⑦テレビ霊能者である。今戸神社はこれら新撰組、アニメ、スピリチュアリティ、婚活といった要素を積極的にとり込みながら、自社を全国区の知名度をもった宗教ツーリズムの対象へと高めてきたといえる。境内の飾り付け、招き猫のデフォルメ、女性神職の前面化などからは「神社空間の女性化」という傾向を指摘することもでき、自社をどのような聖地として見せるのかという点に強く配慮している様子がうかがえる。

これらの諸表象を神社側があえて語り見せようと意図する積極的表象戦略であるとすれば、他方で、語ろうとしない表象戦

略も見受けられる。今戸神社の地誌を検討すると、同社の宗教性は江戸期の弾左衛門囲内とそこで崇敬され昭和十二年に合祀された白山神社との隣接の重要性が浮かび上がってくる。

今戸神社は、一方では歴史・アニメの舞台訪問、婚活・恋愛成就、スピリチュアリティといったより現代的な流れと自社を積極的に結びつけている。こうした点を近視眼的にとり上げれば、ブームに乗ろうとする商業主義としかみえないかもしれない。だが、その地誌と歴史を検討してみると、これらは歴史的に密接に絡み合ってきた諸要素の意図的な取捨選択であり、より長期間に渡る場所イメージの再構成の一環としてとらえ返すことができるのである。

新しい巡礼の創出

——長崎カトリック教会群の世界遺産化——

山中 弘

本稿の目的は、長崎カトリック教会群の世界遺産化の準備に向けた動きの中で登場した、「ながさき巡礼」という観光商品と「五島巡礼」という新しい巡礼形態を紹介しつつ、そこに看取されるカトリック長崎大司教区と観光セクターとの間のせめぎ合いを、「長崎巡礼センター」の活動を中心に検討してみたい。

二〇〇七年「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」国内暫定リスト記載を受けて、長崎観光連盟は、「新しい旅の創造」と

銘打って「ながさき巡礼」という観光商品の開発に着手した。この商品の面白さは、これまでツーリズム側がなかなか手を出せなかったキリスト教の「巡礼」という宗教的実践を、世界遺産指定という付加価値を媒介として、観光の表象として観光空間の中に取り込もうとした点である。

同年、世界のカトリック全体の巡礼意欲の高まりとも呼応して、長崎大司教区も「長崎巡礼センター」を設立した。センターはあくまでも信徒の巡礼のためのものであるが、その設立趣意書には、巡礼を「上質の旅」と表現し、非信徒に門戸を開く姿勢を示している。その後、センターはNPO法人となり、行政の補助金を受けて、非信徒のスタッフを含めた六名で運営される組織に発展した。大司教区にとって、この方向性は財政的理由が大きかったように思われるが、新たな巡礼・宣教戦略の推進のために、自治体・観光セクターの財政的支援をやむなしとする判断があったように思われる。同時に、この展開は、「ながさき巡礼」の正当化（オーセンティシテイ）を必要とする、自治体・観光セクターの利害にとっても重要である。これによって、行政がセンターの人件費などを財政的に支援することができるようになるとともに、センターの活動に観光セクターの意向を反映しやすくなったからである。

二〇一一年七月、巡礼センターが中心になって、「五島巡礼」という新たな巡礼の創出の試みが行われた。筆者の視点からみて、この巡礼の注目すべき点は以下の六点となる。(一)長崎大司教区公認の「巡礼ルート」であること、(二)バッジ・巡礼手帳・巡礼証明書が発行されること、(三)「長崎県」という名称

が使用されること、(四)五島巡礼の目的を、「歴史を辿り、人の生き様、思いを知る旅」と規定していること、(五)手帳に観光協会、宿泊への言及があること、(六)九州商船や野母商船など、五島へのフェリーを運航する企業もこの手帳の販売が可能なこと。これらの諸点から判断すれば、この巡礼が大司教区、観光セクター双方の利害を満たしていることは明らかだろう。

大司教区側のメリットとしては、(一)全国のカトリック信徒の巡礼を促進できる、(二)過疎地域に点在する教会の維持の仕組みを確保できる、(三)宣教の機会を増やせる。他方、観光セクター側では、(一)世界遺産化に伴う観光の振興と離島地域活性化、(二)政教分離原則をクリアしつつ、巡礼を観光に利用する方策の具体化、であろう。つまり、もう少し一般的にいえば、新しい巡礼の創出にあたって、「宗教」と「観光」は相互に協調して、お互いのメリットを確保したものといえるだろう。ただ、この協調がうまくいくかどうかは、正式な世界遺産指定の獲得を前提にすれば、巡礼対象となる地元の教会（聖職者）と一部信徒たちの抱くツーリズムへの強い嫌悪感をどこまで払拭できるのかにかかっているように思われる。

改めて問えば、「五島巡礼」とは、観光商品なのか、それとも宗教実践としての新たな巡礼の創出なのだろうか。恐らく、どちらともいえるものだろう。少なくとも、この試みが成功を収めるとすれば、仏教の「遍路」ばかりでなく、スペインのサンチャゴ巡礼のように、日本でも、キリスト教の「巡礼」が観光マーケットに乗ることが証明されるだろう。今後の「五島巡礼」の展開を注視していきたいと考えている。